

歴文クラブ 30年11月研修会
葛城氏Ⅱ
—葛城山麓の史跡再発見—

1. 実施日： 平成30年11月6日（火） 雨天実施
2. 集合場所： 近鉄西大寺駅南口 8：00 集合
3. 行程スケジュール
出発（8：00）⇒ 橿原考古学研究所附属博物館⇒ 掖上罐子塚古墳⇒
室宮山古墳⇒ かもきみの湯（昼食・休憩）⇒ 高鴨神社⇒ 極楽寺⇒
南郷遺跡・極楽寺ヒビキ遺跡⇒ 飯豊天皇埴口丘陵他⇒ 鴨都波神社⇒
（帰途）奈和・御所IC ⇒ 近鉄奈良駅（16：30 予定）
4. 資料
 - ① 古代豪族・葛城氏について
 - ② 訪問先資料
 - ③ 参加者名簿

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

担当世話人：中井弘 西谷範子 田積彰男 古川祐司
（事務局：中井弘 Tel 090-2381-1122）

葛城氏Ⅱ ―葛城山麓の歴史再発見―

≪Ⅰ、古代豪族・葛城氏について≫

四世紀末から五世紀後半にかけての大和盆地には、東西に二分する勢力があったとされる。三輪山を中心とした倭王権と、葛城・金剛山山麓一帯に勢力を広げた古代の大豪族・葛城氏である。葛城という地域の範囲については諸説があるが、大別して、「葛上郡・葛下郡と忍海郡さらに広瀬郡を合わせた地域という」とするもの（「角川地名大辞典」、「葛城氏の実像（檀考研）」と、広瀬郡を除くとするもの（和田萃氏など）がある。

有名な葛城襲津彦を祖とする葛城本家の本拠地は、葛上郡と忍海郡にかけての地域であったと思われる。平成4年以降、御所市一帯に広がる弥生から古墳時代に及ぶ集落の遺跡や、5世紀に急発展を遂げた南郷遺跡の発掘が進められた。これらの研究の成果により、先進技術を持った渡来系集団を支配下に置き、大いに勢力を伸ばした葛城氏の実像と背景が次第に明らかにされてきている。

1. 古代の葛城地域

(1) 葛城氏出現の以前の葛城

二上山、葛城山、金剛山の東麓から葛城川に及ぶこの地域には、古くから人々が住み着き、弥生時代には一大集落を形成するようになった。

① 鴨都波遺跡

葛城山系に源流をもつ柳田川と金剛山麓より北流する葛城川の合流点に面し、弥生時代から古墳時代前期（4世紀中頃）まで継続して営まれた拠点集落。鴨都波1号墳からの豪華な出土品は大和王権との交流を物語っている。

② 秋津遺跡

鴨都波遺跡の南の平野部に広がる秋津遺跡は、3世紀後半から4世紀中葉にかけて営まれ、大規模な田圃の遺構と大型区画施設や大型の竪穴住居跡板塀とみられる遺構が検出されている。とくに板塀とみられる遺構は、広大な祭祀空間を方形に囲った板塀の可能性があり、豪族葛城氏につながる勢力の存在が考えられる。

③ 中西遺跡

4世紀後半から5世紀前半にかけて営まれた集落の遺跡である。次に述べる室宮山古墳のとのかわりには不明である。

(注) 坂 靖氏は:

「3つの遺跡は、鴨都波遺跡(弥生～古墳前期前半)→秋津遺跡(古墳前期後半)→中西遺跡(古墳中期前半)→名柄・南郷遺跡群(古墳中期中葉～)という順に葛城地域の支配拠点が移動した可能性が考えられる」される。

(2) 葛城氏の勃興

4世紀の後半から5世紀にかけて、この地域を本拠として、大和王権に拮抗する一大勢力を形成したのが、葛城氏である。古墳時代中期(5世紀)にはいると、室宮山古墳(5世紀初め)、南郷遺跡(5世紀中・後半)など、葛城氏の一大興隆をうかがわせる豊かな遺跡が出現し、記紀等の記述を裏付けている。

2. 葛城氏の系統と始祖・葛城襲津彦(かつらぎのそつひこ)

・『紀』では「葛城襲津彦」、『記』では「葛城長江曾都毘古」

記紀によれば、襲津彦の父・武内宿禰(たけのうちすくね)は、景行・成務・仲哀・応神・仁徳天皇の五代の天皇に大臣として仕えたとされる伝説上の人物で、葛城氏のほか、巨勢氏、紀氏、蘇我氏、平群氏、羽田氏など八氏の共同祖とされる。

・襲津彦は神功紀、応神紀、仁徳紀で5度にわたって朝鮮半島に派遣され朝鮮半島において大いに活躍したとあり、朝鮮半島の史書「百濟記」にも「沙至比跪(さちひこ)」としてその名が見えることから、4世紀末から5世紀初めの実在の人物とされる。

・一説には、『書記』の襲津彦像はそれぞれの記事間に脈絡がほとんどないことから、襲津彦は特定の人物ではなく、4・5世紀に対朝鮮外交や軍事に携わった葛城地方の豪族たちの姿を併せて象徴化された英雄であったと見る向きもある。

・神功皇后紀五年の条で、新羅に遠征し、草羅城(さわらのき)を攻略して帰還した。この時に連れ帰った捕虜が、桑原・佐糜(さび)・高宮・忍海(おしぬみ)という四つの村「葛城四邑」の漢人(あやひと)の始祖になった」という。

・「長柄遺跡」では、5世紀の館跡が発掘され、紀氏家牒に残る襲津彦の居館跡ではとされている。因みに襲津彦の墓は、近くの「室宮山古墳」とする説が有力である。

3. 葛城氏の時代

1) 系図(添付別紙)

襲津彦の男子後裔は、息子の葦田宿禰と孫の玉田宿禰との二流に分かれる。

葛城氏の特長として、5世紀の大王家との継続的な婚姻関係が挙げられる。記紀によ

ると、襲津彦の娘・磐之姫は仁徳天皇の皇后となり、履中・反正・允恭天皇を生む。また、葦田宿禰の娘・黒媛は履中天皇の妃となり、市辺押磐皇子（いちのべのおしはのおうじ）をうむ。葛城氏の系統はその孫の顕宗・仁賢に繋がっていく。

2) 時代背景

当時の王権基盤は未熟な段階にあり、大王の地位が各地域の首長から構成される連合政権の盟主にすぎず、大王は不安定な権力を維持するために、自らに次ぐ勢力と常に密接な関係を保ち続ける必要があった。

3) 朝鮮半島の戦乱

葛城氏が活躍した4世紀後半から5世紀には、朝鮮半島では高句麗、百済、新羅の三国がしのぎを削る緊張状態にあった。倭国は百済と新羅に挟まれた伽耶地域を窓口に、最先端の技術や鉄などの資源を取り入れていた。同盟関係にあった百済は、南下する強大な高句麗により、475年、首都・漢城が陥落した。その後、百済は南部の熊津（ゆうしん）に都を遷して、倭国の支援を得て再興を計る。

4) 渡来人の倭国来住

倭国への渡来のもっとも重要な契機は、戦乱であった。彼らは先進技術を持った人たちが多く、倭国はそれを歓迎して受け入れた。

① 4世紀末～5世紀初頭： 高句麗・広開土王の南進の時期

② 5世紀後半： 475年、高句麗が百済の首都・漢城（現ソウル）を陥落させた前後の戦乱。ここに百済は一旦滅亡し、百済系や伽耶系の渡来人が増加。

③ 7世紀中葉： 「新羅・唐」との連合軍により、百済、高句麗は相次いで滅亡する。百済の王族・貴族らが倭国に亡命してきた。

最も多かったのが、①の高句麗軍の南進の時期で、葛城襲津彦が渡来人を連れ帰ったとされる時期にあたる。

5) 渡来人がもたらした先進技術と生活スタイル

4世紀末から5世紀になると、列島に生活痕跡を残す渡来人が近畿中心に広がり、渡来系技術・文化の影響を強くうけた時代が到来する。半島南部の伽耶地域の渡来人らによって、鉄器生産技術が革新され、須恵器の生産も開始された。馬具、甲冑に鋳留め、金属製品に金メッキ、新しい鍛冶技術、さらには金工技術も伝わった。

なかでも重要なのは鉄製農具と灌漑技術であった。耕作不能の地を開拓し、耕地面積を拡大させていった。集落数も増加し、技術革新が社会構造の変化を生み出していった。彼らは高度な土器製作技術だけでなく、半島の生活スタイルも持ち込んだ。竪穴住居内にカマドを備え、緻密で堅牢な須恵器の鍋で煮炊きしたり蒸したりするという調理法は

列島にはなかったものである。

4. 葛城氏本家の盛衰

①玉田宿禰事件

磐之姫の息子・履中、反正、允恭の三人が即位したが、允恭天皇5年（416年）、葛城氏にとって大きな事件が勃発する。

日本書紀によれば、葛城玉田宿禰が允恭天皇の先帝・反正天皇の「殯」を怠り、酒宴を催していたことが天皇の使者に露見する。玉田宿禰は使者を殺して武内宿禰の墓域に逃げ込んだが、允恭天皇によって誅殺される。

②眉輪王の天皇弑逆事件と葛城本宗家の滅亡

允恭天皇の次の安康天皇の次代に、葛城氏宗家を滅亡に追いやる事件が起こる。安康天皇が、義理の息子の眉輪王（まよわのおう）に殺害されたのである。

眉輪王は、葛城円大臣（つぶらのおおみ）の屋敷に逃げ込むが、安康天皇の弟の大泊瀬皇子（後の雄略天皇）の兵が屋敷を囲み眉輪王の引き渡しを要求する。円大臣は、自分の娘の韓媛（からひめ）と自分の所領「宅七区（いえななところ）」を差し出して許しを乞うが、眉輪王と共に屋敷ごと焼き殺される。

極楽寺ヒビキ遺跡から、大型建物遺構が焼けた土と一緒に出土した。和田萃氏は、この時焼けた葛城円大臣のものであろう、とされる。

大泊瀬皇子は、さらに2人の異母兄弟を殺し、イトコの市辺押磐皇子（いちのべのおしはのおうじ）も、狩りに誘い出してだまし討ちにするなど、即位をはばむ葛城氏の血を引くライバルをも一掃する。まさに血塗られた即位であった。かくて、葛城本宗家は滅亡した。

（補記： 葛城の地に葛城を名乗る氏族は、これ以外にも存在しており、6世紀以降の歴史にもたびたび登場するが、今回は取り上げないこととする）

6. 雄略天皇の死とそ後の葛城氏

雄略天皇の即位にあたっては、物部氏や大伴氏、平群氏の軍事力と渡来系氏族の力を背景に、専制王権を確立した。さらに雄略天皇は、葛城氏について一大勢力を誇っていた吉備氏を滅ぼし、さらに播磨や伊勢の在地勢力の討伐も行っている。かくして天皇による全国支配への第一歩を踏み出すことになるのである。

雄略天皇が死ぬと、有力な後継者が見当たらず、大王家の権力は一気に弱体化する。雄略の妃・円大臣の娘・葛城韓媛（かつらぎのからひめ）が生んだ白髪王子（清寧天皇）が大王位を継ぐが、清寧天皇には子が無く、その死後、一時的に権力の空白状態が生ず

ることになった。

その時、忍海（おしみ）角刺宮で王政を執ったといわれるのが、葛城の血をひく飯豊皇女（飯豊天皇）である。飯豊天皇は天皇の系譜にはなく、正式に即位したとは見做されていない。

その後は、市辺押磐皇子の遺児である顕宗天皇・仁賢天皇が続く。しかし葛城氏がかつての勢力を取り戻すことはなかった。

7. 蘇我氏の台頭

葛城氏と同じ武内宿禰を始祖とする蘇我氏は、葛城氏が滅亡後、渡来人の東漢氏を主導して葛城一帯に残された生産工人を再編成する役割を担った。

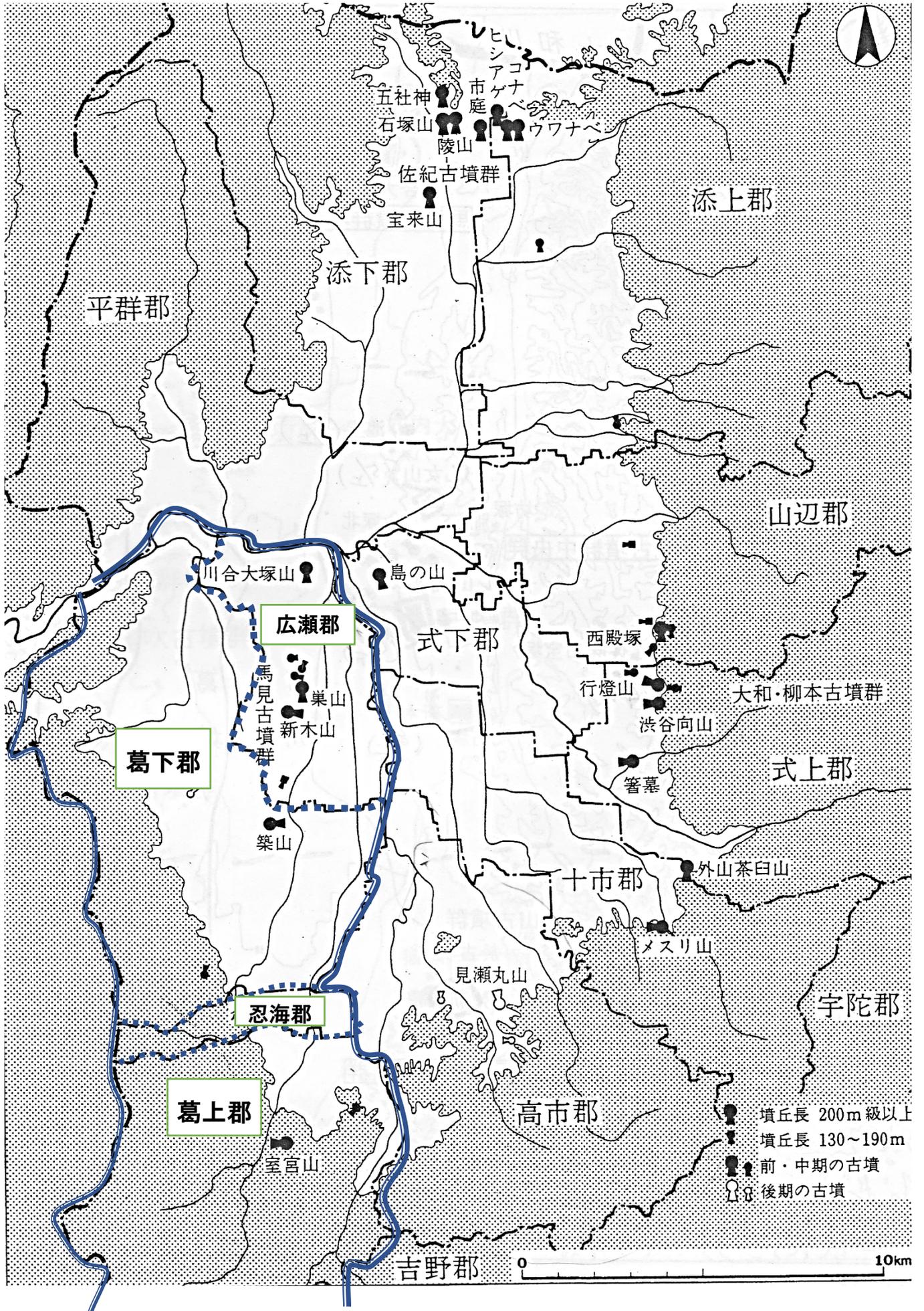
全盛を誇った蘇我馬子は推古天皇の時代に、葛城氏の拠点であった葛城高宮を「吾が本貫の地」と主張して、その領有を願い出たという記述が日本書紀にある。

さらにその子・蝦夷は皇極天皇元年（642）に、葛城の高宮に祖廟を建て、そこで「八らの舞」を挙行了たとある。この舞は中国では天子だけに許されたもので、この説話は蘇我氏の専横を物語る名高い話とされている。

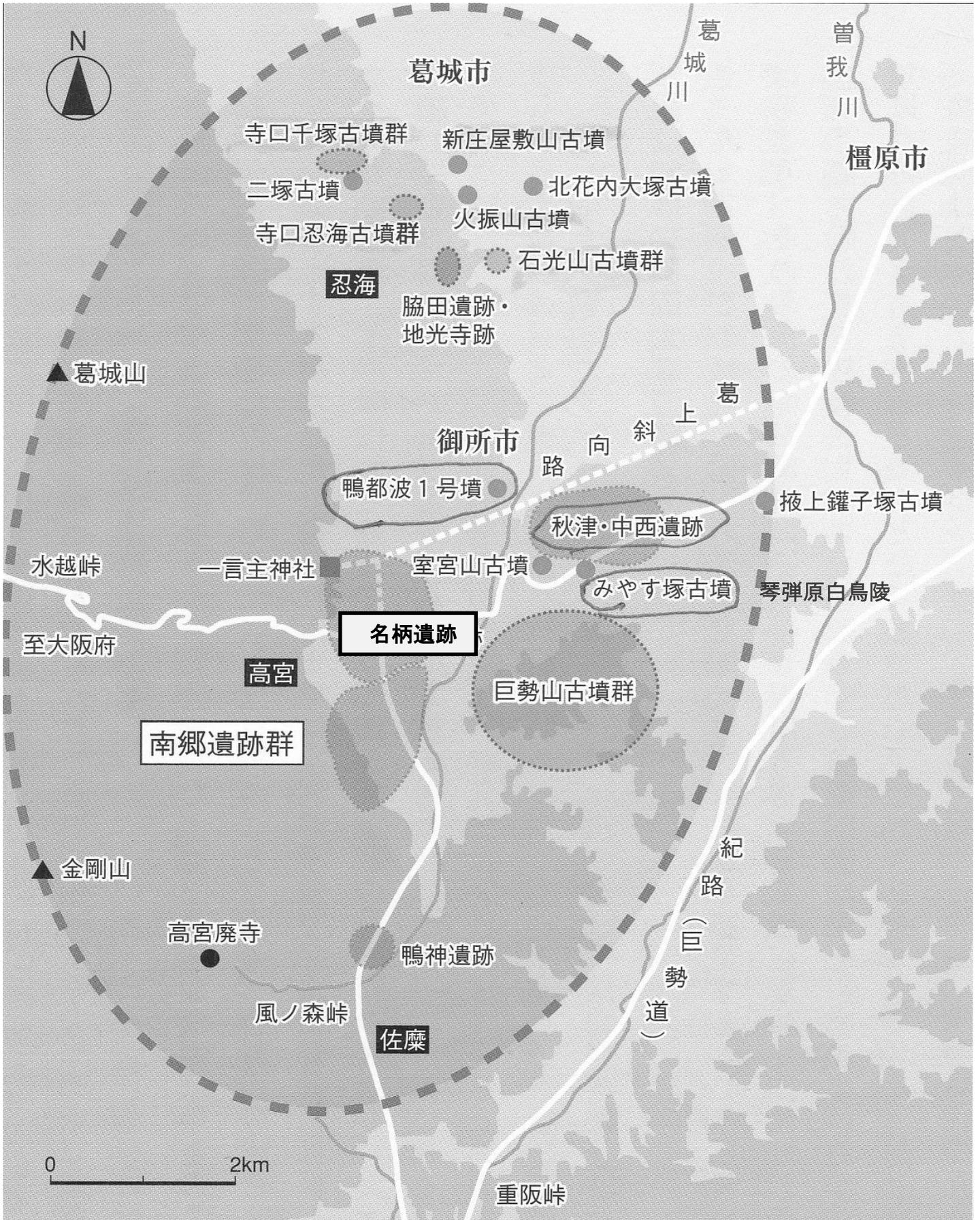
（by 中井弘）

- 参考文献 ・「葛城と古代国家」門脇禎二 ・「葛城の王都・南郷遺跡群」 坂靖・青柳泰介
・「道が語る 日本古代史」近江俊秀 ・「大王から天皇へ」熊谷公男
・「倭国と渡来人」田中史生 ・「葛城氏の研究」平林章仁

以上

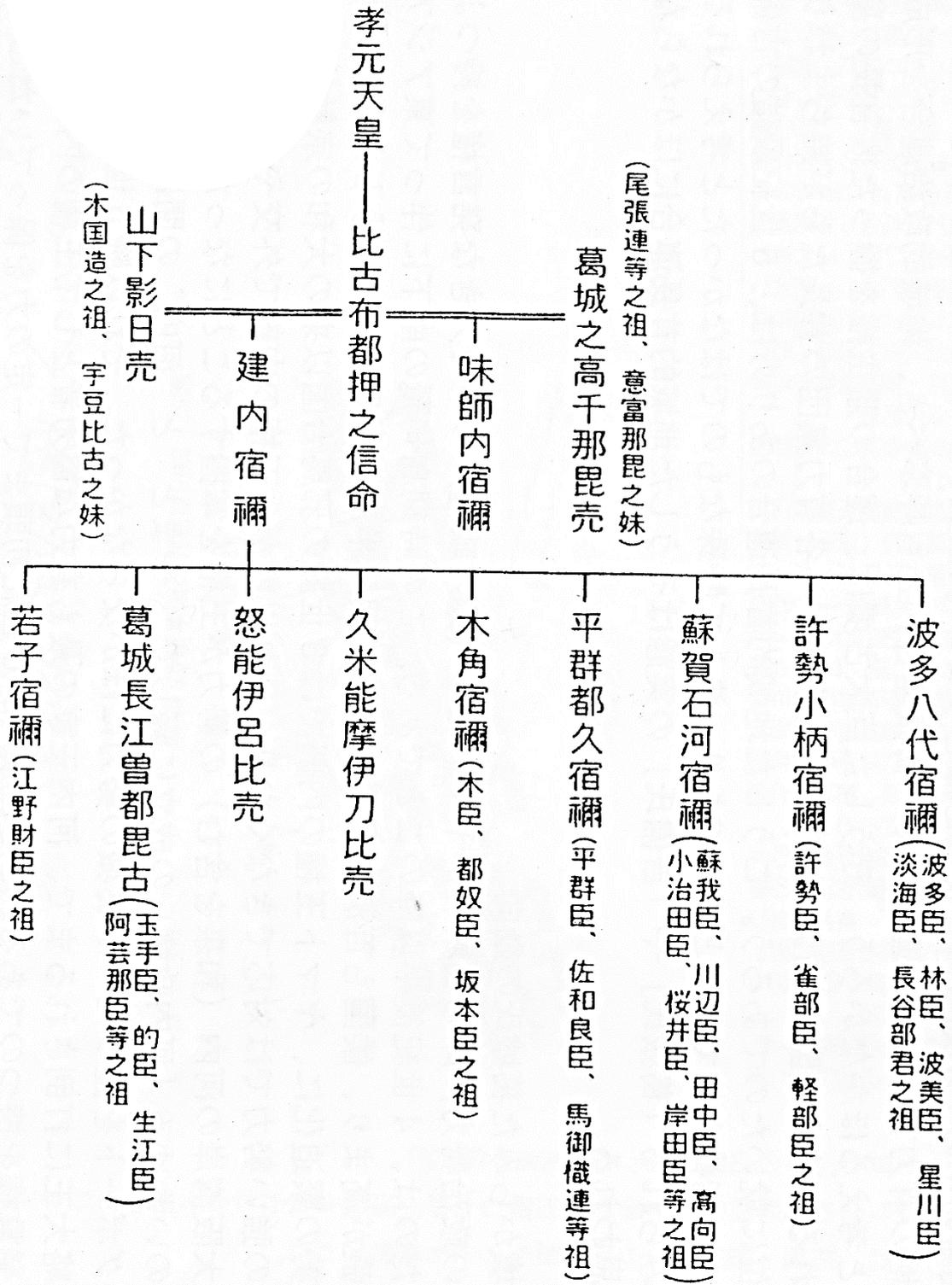


葛城四邑 (忍海、高宮、桑原、佐糜)



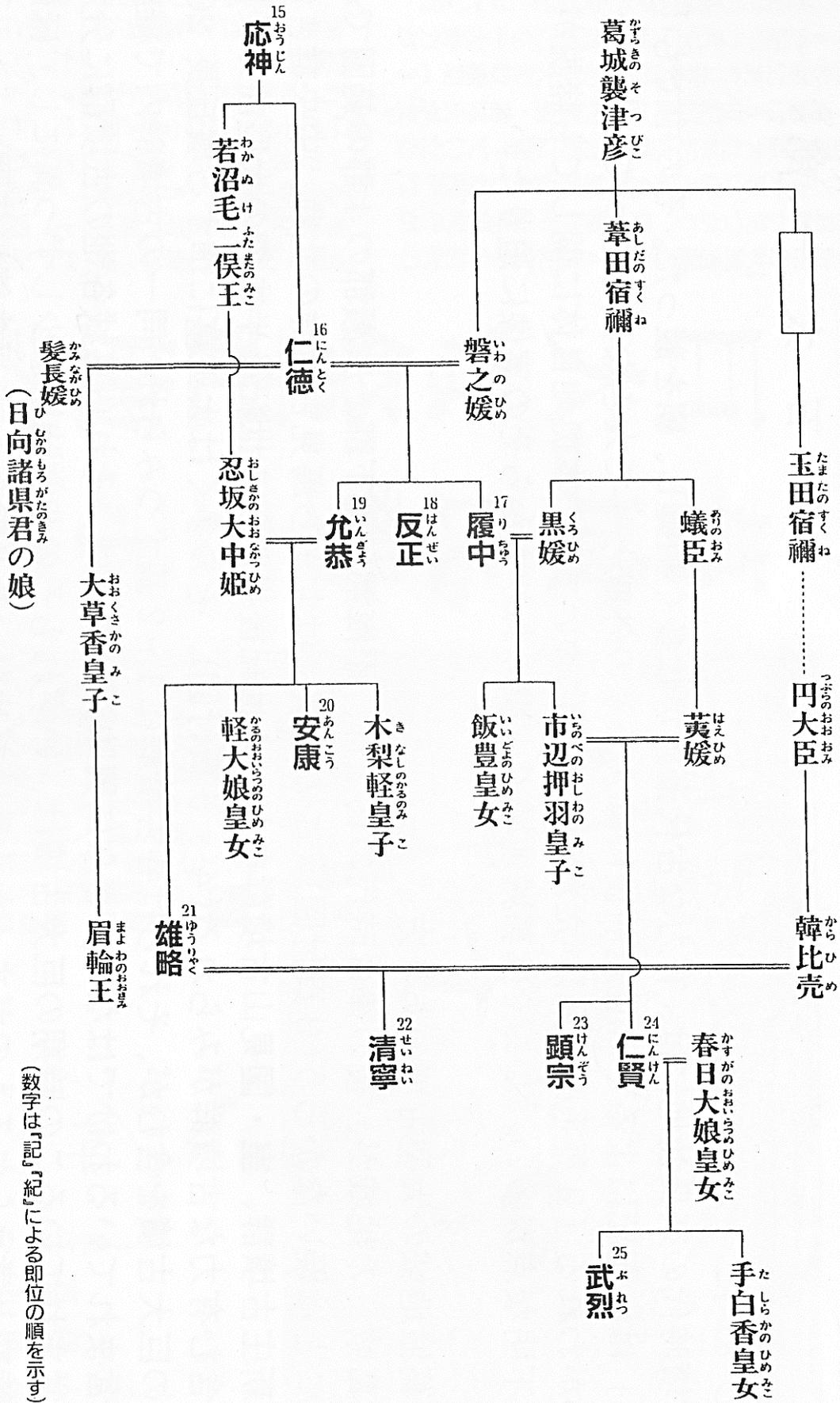
付表Ⅲ

建内宿禰系図 (『古事記』による)



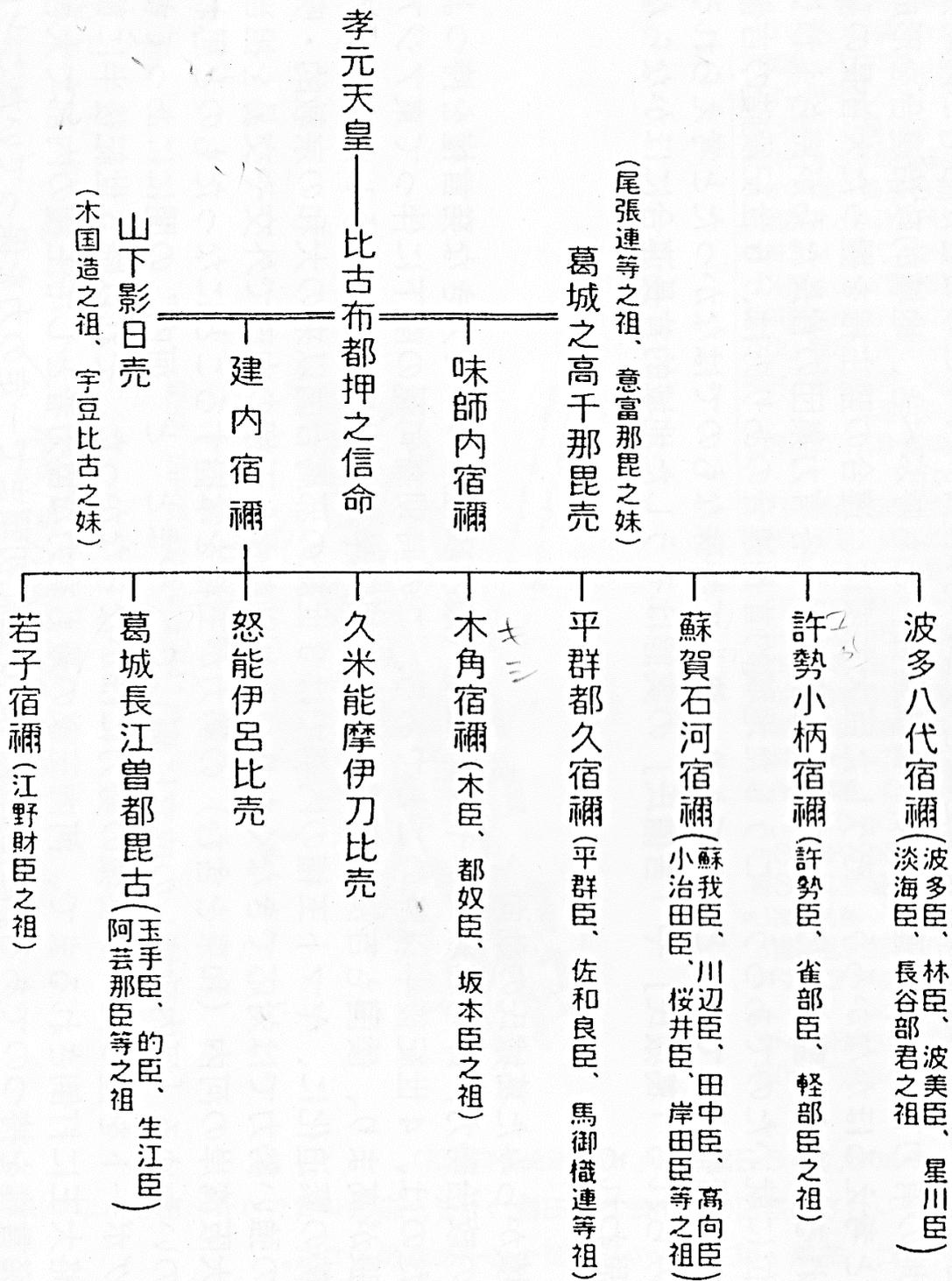
付表IV

大王家と葛城氏



《塚口義信氏作成》

建内宿禰系図 (『古事記』による)



《訪問先 資料》

(そのⅠ) 掖上罐子塚古墳 (わきがみかんすづかこふん)

・築造は5世紀後半、墳形は前方部が短い前方後円形で、墳丘主軸を東西方向として前方部を西方に向ける。墳丘は後円部では3段築成、前方部では2段築成。墳丘長は149メートル、南葛城地方では室宮山古墳(238メートル)に次ぐ規模になる。

これまでに小規模な調査が実施されている。1977年、第1次調査、1991年、第2次調査

・墳丘表面では葺石・円筒埴輪列が認められるほか、墳頂部では形象埴輪(水鳥形・冠帽形・家形・草摺形・冑形・大刀形・靱形埴輪)が検出されている。また墳丘周囲には周濠が巡らされ、周堤ではコウヤマキ製の木製品が検出されている。主体部の埋葬施設は未調査のため明らかでないが、後円部墳頂に盗掘坑が残り、長持形石棺が埋納されていたと伝わる。出土品としては、埴輪・木製品のほか金銅製帯金具・心葉形垂飾(しんようがたすいしよく)・挂甲小札(けいこうござね)・琴柱形石製品(ことじがたせきせいひん)・鉄鏃(てつぞく)がある。

・被葬者は不明で、古くから様々な文献に取り上げられている。第6代孝安天皇陵、日本武尊白鳥陵と記された文献や葛城氏の始祖とされる武内宿禰(たけのうちのすくね)や雄略天皇に滅ぼされた葛城円王(かつらぎのつぶらのおおきみ)や眉輪王(まよわのおおきみ)とする説もある。

(そのⅡ) 室宮山古墳

・室宮山古墳は墳丘長238mの前方後円墳で、葛城地域最大である。築造年代は、5世紀初頭とされ、紛れもなく葛城地域に君臨した「葛城を代表する首長」の墳墓である。古墳の主には、葛城襲津彦とする説が有力である。襲津彦の居館跡といわれる長柄遺跡からも近い。

・後円部の基部には八幡宮が祀られているが、社域には第六代「孝安天皇室秋津宮跡」の石碑が建つ。古事記には「葛城室の秋津島宮にいて、天下を治めた」とある。

・埋葬施設である竪穴式石室と長持形石棺は、後円部の発掘現場で見ることができる。埋葬施設を取り囲んだ家形埴輪をはじめとする巨大な形象埴輪群も発掘され、これらは高野槇の木棺などと共に、橿考研博物館の中心部に展示されている。現地には、出土した靱型埴輪のレプリカが置かれている。また、朝鮮半島で焼かれた灰色の陶質土器が出土しており、当時の朝鮮半島との往来を物語る。

・室宮山古墳の背後の巨勢山では、5世紀から6世紀の間に築かれた総数600基の古墳が

あり（巨勢山古墳群）、奈良県で最多の古墳群である。

（そのⅢ）高鴨神社

- ・金剛山の東側の麓にある神社で、式内社である。本殿は三間社流造で重要文化財。
主祭神は阿治須岐高日子根命（あじすきたかひこねのみこと）《迦毛之大御神》で大国主命の子。全国のカモ（鴨、賀茂、加茂）神社の総本社と称するが、京都の賀茂神社は、ここの高鴨神社とは別との説も唱えている。ともあれ、古い時代より住みつき勢力を広げた鴨氏一族の発祥の地で、その氏神である。
- ・この丘陵を出でて葛城川岸边に移った一族が鴨都波神社を、東持田に移った一族が葛城御歳神社を祀った。高鴨神社を上鴨社、御歳神社を中鴨社、鴨都波神社を下鴨社という。
（主祭神のほかにくっつか配祀されている神があるが、人名牒では主祭神以外の神は不詳との説があるので省く）
- ・春には丹精された多くのニホンサクラソウの鉢植えが飾られて、それは見事である。

（そのⅣ）南郷遺跡群 2.4 平方 km の巨大集落跡「葛城の王都」

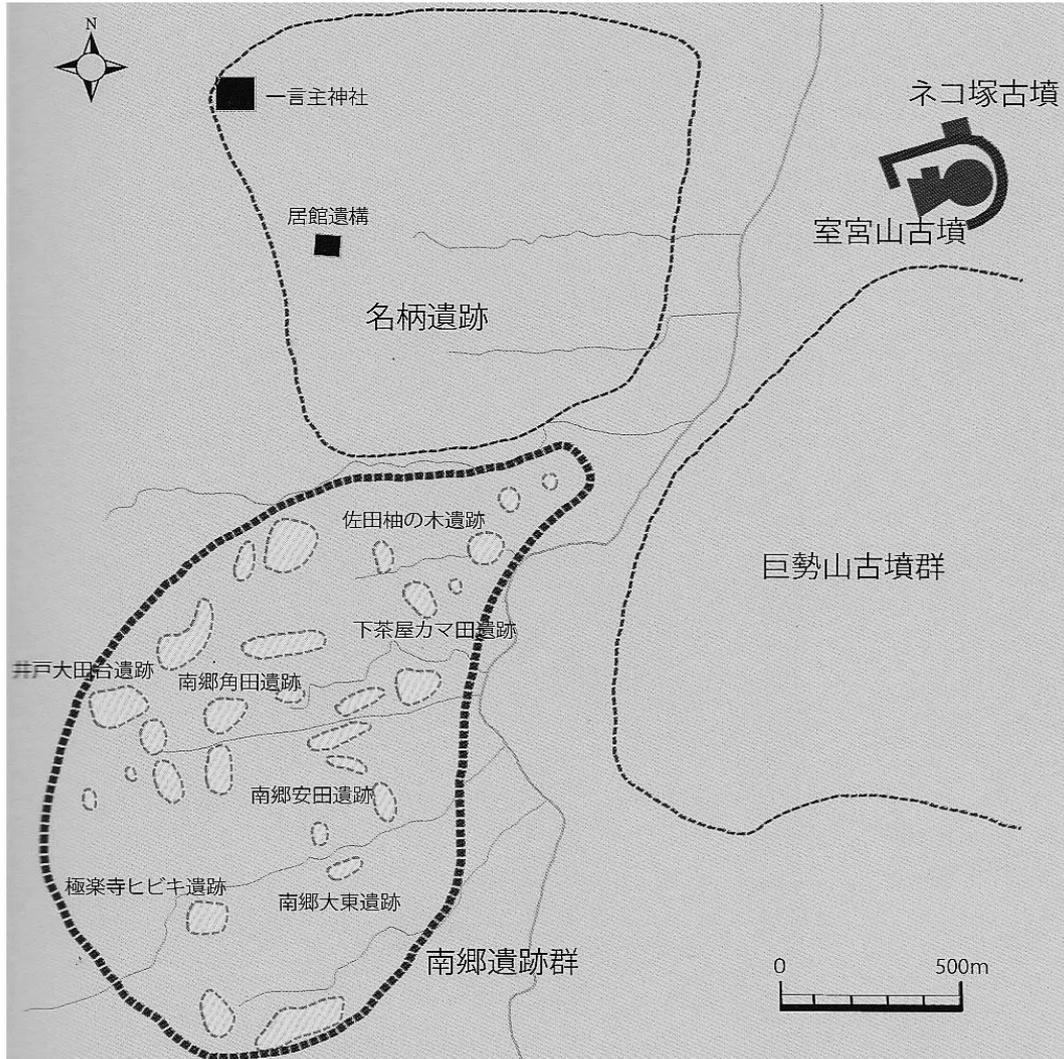
・1992 年から県営圃場整備事業に先だち、事前の発掘調査が檀考研によって開始された。2004 年までの調査で東西約 1.4km 南北約 1.7km にも及ぶ広大な遺跡が発掘された。

・豪族の屋敷をはじめ、葛城氏の祭殿と考えられる高殿や水に関わる祭祀場、大型建物、工房、倉庫など古墳時代の大豪族の本拠地の実態を窺い知ることが出来る重要な遺跡であることが判った。

・特に、葛城氏の経済基盤を支えたであろう、さまざまな工房跡などは、古墳時代の生産を考える上で、また、その技術力を担った渡来人の動向などを考える上で重要な遺跡で、歴史的意義は計り知れない。

《性格の異なる遺跡グループ》・・・(付表Ⅴ)

- ①王の高殿・祭殿と導水施設： 極楽寺ヒビキ遺跡・南郷安田遺跡・井戸井柄遺跡
- ②首長の居住地： 多田桜木本遺跡
- ③武器生産を行った特殊工房： 南郷角田遺跡
- ④大型倉庫群： 井戸大田台遺跡
- ⑤手工業生産を指導した親方層の居住地： 南郷柳原遺跡・井戸井柄遺跡
- ⑥手工業生産を行った一般住民の居住地： 下茶屋カマ田遺跡・南郷千部遺跡・南郷生家遺跡・南郷田鶴遺跡・佐田柚木遺跡・佐田クノ木遺跡・林遺跡井戸池田遺跡
- ⑦土器棺墓からなる一般住民の墓地：南郷九山遺跡・南郷岩下遺跡・南郷生坪遺跡



(そのV) 極楽寺ヒビキ遺跡

・南郷遺跡群の南東端の高台に位置する広い平坦地で、西は金剛山の傾斜地となっているが、三方は谷で急な斜面となっている。奈良盆地の南部一帯を見渡せた絶好の地勢である。

・この平坦地は 6000 平方メートル以上ある。その中に石垣を積んだ堀と塀で区画された 2000 平方メートルに王の空間があり、王はこの高台に登って「国見」をおこなったのだろう。王が祀りを司っていることを内外に知らしめるための巨大構築物であった。と想像される。

・南郷遺跡群の各所では、生活に使用された土器が大量に出土するのに、この遺跡では生活の痕跡がほとんど無い。つまり、日常生活を営んだ形跡がなく、この場所が神聖な空間であったことを裏つけている。

・67坪の楼閣のような「高殿」がある。柱は長方形で、巨大な掘立柱建物であった。広い範囲で焼け土があり、建物が火災にあったことは確実であることから、463年雄略天皇によって焼き殺された葛城円大臣の屋敷跡とも考えられる。

・ここには、室宮山古墳の竪穴式石室の真上から出土した、直弧文を柱に施した家形埴輪と同様の建物が存在していたと推測されている。建築学者の黒田龍二氏によって再現された模型が、橿考研付属博物館に展示されている。

・極楽寺ヒビキ遺跡の支配者の視野は、遠く朝鮮半島にまで及んでいることがうかがえ、ヤマト王権の中にあって大きな権力を有していたことは確かであると思われる。「葛城の王都」の著者の坂靖氏は、この遺跡の主は、葛城氏と断定できるのでは・・・とされる。

(そのVI ①) 角刺神社 (つのさしじんじゃ)

・飯豊青皇女(いひとよあおのひめみこ)が政(まつりごと)を行った忍海角刺宮跡(おしぬみのつのさしのみやあと)として知られている。

・日本書紀によると、飯豊青皇女は、2人の弟が位を譲り合い長く位につかなかったため、この場所で政を行なったと記されている。日本の歴史において、最初の女帝は推古天皇と言われており、日本書紀や古事記は彼女と天皇としては記していないが、後世には彼女を天皇とする歴史書も残されている。

・飯豊青皇女は、忍海郎女(おしぬみのいらつめ)、忍海部女王(おしぬみべのひめみこ)などとも呼ばれた。『古事記』では、億計(おけのすめら)・弘計王(をけのすめら)の姉ではなくて叔母だったとある。

・飯豊青皇女も葛城襲津彦(かづらきのそつひ)この血を受け継いでいるとされている。皇女を葬るといふ葛城埴口陵は、神社より北約1km、新庄町北花内の前方後円墳に葬られている。

(そのV ②) 飯豊天皇埴口丘陵 (はにぐちのおかのみささぎ)

・陵は、古墳時代後期初頭頃の築造と推定される。宮内庁により第17代履中天皇皇孫女の飯豊天皇の陵に治定されている。遺跡名は「北花内大塚古墳(きたはなうちおおつかこふん)」

・墳丘長 90 メートルの前方後円墳。墳形は前方部が大きく発達した前方後円形で、前方部を南西方に向ける。墳丘表面では円筒埴輪（朝顔形埴輪含む）・形象埴輪（盾形埴輪）のほか、コウヤマキ製の笠形木製品が検出されている。墳丘周囲には周濠（幅 10-15 メートル）が巡らされる。主体部の埋葬施設および副葬品は明らかでない。

・陵について『日本書紀』では「葛城埴口丘陵」、『延喜式』諸陵寮では「埴口墓」と記載される。『日本書紀』では「陵」と表記し、「墓」ではないことが注意される。

（そのVI） 鴨都波神社（かもつばじんじゃ）

・積羽八重事代主命（つみはやえことしろぬし）と下照姫命（したてるひめ）を主祭神とし、建御名方命（たけみなかた）を配祀する。葛城氏・鴨氏によって祀られた神社で、高鴨神社（高鴨社）・葛城御歳神社（かつらぎみとしじんじゃ）（中鴨社）に対して「下鴨社」とも呼ばれる。

・事代主神は元々は鴨族が信仰していた神であり、当社が事代主神の信仰の本源である。大神神社に祀られる大国主の子に当たることから、「大神神社の別宮」とも称される。全国的に分布する鴨社の源流の一つにあげられる。

・本神社の周辺一帯は「鴨都波遺跡」で、弥生時代から鴨族がこの地に住みついて農耕をしていたことがえる。

（そのVI ②） 鴨都波遺跡（かもつばいせき）

・弥生時代の拠点集落である。これまでの度重なる発掘調査で、葛城川の段丘上から 20 棟あまりの竪穴住居や高床式建物のほか、護岸水路、溝、土坑などが確認されている。

・特筆されるのは古墳前期の御所市鴨都波 1 号墳で、一辺 20m の規模の方墳は、中央に粘土槨を設け、木棺の内外からは4 面の三角縁神獣鏡はじめ硬玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス玉などの装身具、鉄剣、鉄刀、漆塗靱、楯、短甲、鉄鏃などの武器・武具類などが出土した。

歴文1 1月研修会 名簿 (敬称 略)

2018.11.6 (火)

番号	お名前	申込日	受付	備考
1	青木幸子	9月18日	メール	
2	青木芳一	9月27日	ならやま	
3	池田信明	9月22日	メール	
4	井戸八穂子	10月12日	ならやま	
5	内河洋文	9月18日	メール	
6	小田進八郎	9月20日	メール	
7	川勝孝雄	10月5日	ならやま	
8	川岸美子	9月20日	メール	
9	千載輝重	9月21日	メール	
10	田積彰男	—	メール	担当世話人
11	田中克彦	10月5日	ならやま	
12	田中善英	9月19日	メール	
13	田矢恵造	9月25日	幹事会	
14	戸田博子	9月25日	幹事会	
15	富井忠雄	9月27日	ならやま	
16	富江文雄	10月12日	ならやま	
17	中井 弘	—		担当世話人
18	西谷範子	—		担当世話人
19	羽尻喬	10月5日	ならやま	
20	坂東久平	9月18日	メール	
21	福田美伸	9月19日	メール	
22	古川祐司	—		代表
23	松尾 弘	9月27日	ならやま	
24	松本武彦	9月27日	ならやま	
25	森 英雄	10月12日	ならやま	
26	八木順一	9月18日	メール	
27	弓場厚次	9月21日	メール	